

2016年度 日本社会心理学会「若手研究者奨励賞」 選考経過と選考結果

2017年1月20日

本年度の「若手研究者奨励賞」受賞者の選考経過と選考結果をご報告申し上げます。

本年度も、42件の多数のご応募をいただきました。4名の選考委員による厳正な審査の結果、以下の6名を受賞者と決定致しました。

選考委員の先生方に各自、講評を書きいただきましたので、併せてそちらもご覧ください。

「若手研究者奨励賞」選考委員長 山口裕幸

【選考経過】

7月2日

広報担当常任理事の三浦先生に依頼して、今年度の募集要項と応募用紙を学会のHPにアップするとともに、募集開始をメールニュースで会員に告知をした。

9月30日

応募を締め切った。総数42件の応募があった。

10月3日-10月14日

以下の基準で、理事から2名、一般会員から2名を選考委員として依頼し、下記の4氏について会長と常任理事会の承認を得た。

1. 応募者の指導教員、共同研究者ではないこと
2. 理事として、ほかの委員や役割を負っていないこと
3. 女性を一人入れること
4. 一人は昨年と同じ委員を入れること

■選考委員（敬称略）

- ・理事より： 外山みどり(学習院大学)、浦光博（追手門学院大学）
- ・一般会員より： 岡 隆（日本大学）、辻本昌弘（東北大学）

10月17日-11月30日

・応募者42名の応募書類を全て、個人情報（姓名、所属、指導教員など）を黒塗りした上でPDF化したファイルを選考委員に送付し、第1次審査を依頼した。

■第1次審査

・選考委員はお互いに匿名で、独自に審査した。選考委員長は、指導学生からの応募があったため、審査には加わらなかった。

- ・選考委員の1人から、応募書類を精査したところ、自分か過去に共同研究もしくは研究指導を行ったと思われる応募が2件あるとの連絡を受けた。利益相反の観点から、その2件の応募については、評価得点をつけないようにしてもらい、他の3人の選考委員の評価の平均値を代入して、得点とすることで了解を得た。

- ・審査結果はA（優れている）、B（普通）、C（やや劣っている）で表記した。ただし、A評価は5本以内とした。

12月1日－12月4日

- ・第1次審査結果が出そろった。A評価は40点、B評価は10点、C評価は5点をそれぞれ与えて得点化し、4名の選考委員の合計点を算出した。この一覧表を元に、応募者の個人情報伏せのまま、選考委員同士でメール審査を行った。

- ・得点を集計したところ、1位が同点で4名、それに5位が僅差で続き、さらに少しの差で6位が続くという結果であった。ただし、6位はひとりの選考委員が利益相反の観点から評価を控えた応募であり、そのことが評価にどのような影響を与えたか慎重に検討する必要があると判断された。

- ・1位で同点の4名は確定として、

- ①僅差で続く5位を授賞対象に加えるか、そして、

- ②6位の応募について、ひとりの選考委員が評価を控えたことを踏まえた上で、授賞対象に加えることか、

の2点について、2次審査を行って検討することで合意した。

12月5日－12月14日

■第2次審査

2次審査では、上記①②の観点について、選考委員会の意見を求めた。各委員から届いた意見を取りまとめたところ、①5位を授賞候補とすることについて全員が同意し、また、②6位となっている研究についても、再度、応募書類を読み直して、授賞候補とすることで問題ないという認識で一致した。

以上の審議の結果を受けて、1次審査で授賞対象として合意していた1位の4人に、5位、6位の2名を加えて、本年度の授賞対象候補者を6名とすることで決定した。

【選考結果】

■ 受賞候補者（応募書類受付順）

氏名	所属	研究タイトル
岩谷 舟真	東京大学大学院博士課程 1 年	多元的無知の維持メカニズム—逸脱者罰と関係流動性に着目して —
白井 理沙子	関西学院大学大学院博士課程前期課程 2 年	個人の道德基盤が道德違反に対する初期の知覚処理プロセスを決定するか
黒田起史	東京大学大学院修士課程 1 年	信頼を支える認知・神経基盤：Social Value Orientation が裏切り回避に与える影響の定量的検討
戸谷 彰宏	広島大学 大学院 博士課程前期 2 年	死の脅威に対する対処行動の包括的理解に向けて：世代・文化的自己観・愛着スタイルからの説明
田崎 優里	広島大学大学院博士課程前期 2 年	“反社会的特性の社会性”の実証
土田 修平	北海道大学大学院博士後期課程 2 年	象徴罰の進化：強化学習と進化ゲーム理論の統合ルールを用いた理論的・実証的検討

外山みどり 先生 (学習院大学)

今年度は 42 名の応募者の中から 6 名の方々が若手研究者奨励賞を受賞されました。私たち選考委員は、応募者の個人情報伏せた状態で応募書類の研究内容のみで評価を行いますので、最終的な受賞者のリストを見て初めて氏名や所属を知ることになりますが、今年度は修士課程、博士前期課程の在学者が過半数を占め、若手の中でもさらに若手の方々が健闘されたということが出来るかもしれません。受賞された方々にお祝いを申し上げますと共に、惜しくも選にもれた方々には、来年度、より充実した研究計画で、あるいは新しい発展的なテーマで再挑戦されることをお勧めします。研究計画を立て、申請書を書くことは今後の研究生活の中でも繰り返されるでしょうが、他人から理解され、高い評価を得ることを目指して研究計画の構想を練ることは、自らの思考を整理し、新たなアイデアを得るきっかけになると思います。従来の研究の方向を踏襲した着実に手堅い研究に終始することなく、新しい角度からの柔軟な発想を含んだ独創的な研究が若手の方々によって展開されることを願っています。



浦 光博 先生 (追手門学院大学)

今回の審査に当たって 3 つの視点から評価を行った。第 1 にテーマの新規性、第 2 に計画の具体性・実現可能性、第 3 に得られるであろう結果のサプライズの程度である。これらの規準で応募された研究課題を評価したところ、判断に迷うケースはほとんどなかった。最終的な評価のランキングを見ると、私が A 評価とした 5 件はいずれも上位 7 位までに入っており、逆に C 評価とした 12 件中 10 件は 20 位以下にランキングされていた。審査委員の評価にかなりの整合性があったことが示唆される。

最終的に授賞対象となった 6 件の研究課題はどれも 3 つの基準で一定以上の水準にあると評価できるものであり、一刻も早く成果を見てみたいと思わせるものであった。逆にランキングの低い研究課題は 3 規準のうち 2 つ以上で低評価しか与えられなかった。一見、興味をひくのだが計画に具体性がなく、どのように検証しようとしているのか読み取れないもの、逆に計画は具体的で実現可能性は十分なのだが、改めて検証するまでもないテーマを扱ったもの、サプライズと言うよりも荒唐無稽と表現した方がよさそうなものもあったように思われる。

あと一步で授賞対象となったと思われる研究課題は少なくなかった。狙いは興味深いのだが、やろうとしていることと研究計画とが微妙にずれているもの、扱われている複数の

構成概念の整理が不十分であるため、研究の焦点が曖昧になってしまっているものなど、読んでいて「惜しい！」と声を出したものも多い。改めて自身の研究課題を見直し捲土重来を目指していただきたい。



岡 隆 先生（日本大学）

拝見した研究のタイプを大別すると、すでに確立された理論や方法・技術を駆使して、着実な成果が期待できる研究と、そのような既成の枠組みのないところで新しい問題に果敢にチャレンジしようとする研究があったように思います。本賞の規程には「若手の優れた研究活動を支援」することとあり、若手は「30歳以下、または、大学院の課程在籍」と定義されています。これら2つのタイプの研究がいずれも優れていることは言うまでもありませんし、この若手の定義は操作的なもので審査の手助けになりません。私のように創造力が欠如し、既成の枠組みのなかでしか仕事できていない人間に言う権利はありませんが、いやむしろ、そういう人間だからこそこの既成の枠組みの危うさを思うとき、若手には後者のタイプの研究を期待したいと思って審査させていただきました。その結果、私が、評定者間信頼性を下げてしまう要因になったのではないかと危惧しています。社会心理学会が「若手」に何を期待するかについてもっと議論が必要かもしれません。



辻本昌弘 先生（東北大学）

応募書類からは、若手研究者のみなさまが優れた研究を精力的に推進されていることがよく伝わってきました。選考で最も悩ましかったのは、堅実で所期の結果が出そうな研究を高く評価するのか、それとも結果は出ないかもしれないがワクワクするような大胆な発想をもつ研究を高く評価するのかというところでした。両者のかねあいを考慮して慎重に選考を進めたつもりですが、学術の進展のためには大胆かつ挑戦的な研究が大切だと思います。また今回は、現実場面に実践的に関わる研究の応募がやや少なく、この点は寂しいところでした。とはいえ全体としてみれば優れた研究が多く、受賞者を絞る作業はとて難しいものでした。研究の評価軸にはさまざまなものがあり、研究の最終的な価値は長い年月をかけて定まるものだと思います。今回受賞した研究はもちろん、惜しくも選考から漏れた研究からも、将来、すばらしい成果が結実することを期待します。